

り、その上側の1細胞は2核からなる。胚乳形成は造膜型であり、胚形成はコンギク型のキオン変型である。種皮は珠皮の表皮層のみが発達して残り、他の層は消失する。果皮形成の初期の段階では表皮層、下皮層、その内側の数層からなる柔組織が認められる。下皮層と柔組織との間に樹脂状の物質が分泌され、暗色の堅いセメント層を作る。この層はヒヨドリバナ連とメナモミ連とに見られるものである。

○キミノクロガネモチについて (新 敏夫) Toshio SHIN: On *Ilex rotunda* f. *xanthocarpa*

本品種について私は本誌 57(2): 40 (1981) に新品種として発表しましたが原 寛先生等の御注意により、すでに本誌 41: 100 (1966) に *Ilex rotunda* Thunb. f. *xanthocarpa* Uyeki et Tokui として発表されていることを知りましたので、私の発表を取消さして戴きます。尚本品種については林 弥栄氏も「北陸の植物」25(3): 55 (1978) で全く同じ学名で発表されていますがこれも無効となります。

***Ilex rotunda* Thunb. f. *xanthocarpa* Uyeki et Tokui** in Journ. Jap. Bot. 41: 100 (1966).

*Ilex rotunda* Thunb. f. *xanthocarpa* Hayasi in Journ. Geobot. 25: 55 (1977), syn. nov.

*Ilex rotunda* Thunb. f. *xanthocarpa* Shin in Journ. Jap. Bot. 57: 40 (1981), syn. nov. (鹿児島大学教養部)

□Young, D.A. & D.S. Seigler: **Phytochemistry and angiosperm phylogeny** 295 pp. 1981. Praeger ¥11,650. これは1979年8月15日に Oklahoma State University で開かれた表記のシンポジウムで述べられた論文を集めたものである。主として米国とデンマークの研究者による8論文を収めている。ベタレーンがナデシコ科を除く大部分とサボテン科にみつかって後者が前者に包含されるにいたったことは1966年以來明らかだが、近年じつにたくさんの化合物の存在が明らかになっている。DNA, アミノ酸, Glucosinolato-myrosinase, テルペン, iridoids, Ellagic acid 其他じつに多い。それらに関連する討論は多岐に亘っており一致したとは言い兼ねる。中でも Dahlgren (デンマーク) と Thorne (カリフォルニア) の両氏は顕花植物を一瞥できる類縁図と分類表とを掲げ、前者ではその類縁図の概当する部門に点を打って沢山の図でそのよって来たる処の確実性を示している。前者では双子葉が79目、単子葉が27目、後者では40目と12目と少ないが分類表には亜科迄を網羅している。最近 Cronquist の分類表も出たのでこれからはこの分野の議論に一層の熱がかかると思われ、大いに期待が持てることである。(前川文夫)